産土

彦島八幡宮社報
第 50 号

「共に生き、共に生む、共生の生活でありますやうに」

宮司　柴田　宜夫

平成二十八年の清々しき新年を寿ぎ、謹んでお慶びを申し上げます。

わが国は、今年、中国、そして、不安定な金融システム、さらに、天変地異という三つのリスクへの備えが必要だそうです。　中国の経済成長が減速していしますし、南シナ海など安全保障面でのリスクも大きくなっています。　金融が、世界の実態経済を揺るがす度合いが、極めて高くなってきました。　この二つのリスクへの備えは、政府の洞察力のある外交や、経済金融政策に委ねるしかありません。　しかし、人知では、いかんともしがたいのが、三つめのリスクである天変地異です。　南関東や東海での巨大地震は、いつ起きても不思議ではないそうですし、火山の噴火や天候不順による風水害も増加しています。　これは、前述の二つのリスクが、外交上の安全保障とするならば、内なる安全保障といえるでしょう。　昨今は、テロへの備えも必要です。　防災や減災等、国を挙げて、地域住民の力を結集し、大難（だいなん）は小難（しょうなん）に、小難は無難にする努力が必要ではないでしょうか。

津田塾大学教授で、疫（えき）学者の三砂（みさご）ちづるさんは、「女が女になること」の著作のなかで、「我々は、単独でこの世に存在しているわけでなく、つながりのうちに、この自然の中で、許されてあり、生かされている。　何か大きな存在の一部として存在している」と、書かれています。　三砂教授の言われるように、大きな存在の一部である私共は、自分の命、これからの人生に、もっともっと謙虚に向き合うことが大切です。　今ある命に感謝をして、自然を大切に、人々の交流を大事に暮らす、共に生きるのです。　そして、明るい前向きな気持ちをもって、日々を楽しみつつ、新しいものをつくりだしていく、共に生むのです。　共に生き、共に生む、共生の生活こそが、危機への備えでもあり、共存共栄の道のりではないでしょうか。

八幡宮からのお知らせ

どんど焼き＝一月十七日（日）執行【午前十一時頃　忌火火入式】

※正月飾りは、みかん・橙（だいだい）を外して当日午前中までにご持参下さい。
執行後は来年まで受付致しませんので、予めご了承下さい。

㊟鏡餅・ビニール袋・結納品・人形・仏具・民芸品等は一切お断りいたします。

宮司プレス総集編

※103号～108号（要点抜粋）を総集編としてお届けします。
全文ご覧になりたい方は八幡宮ホームページへアクセスしてください。

第一〇三号（平成二十七年五月三十一日）

◇数学者の藤原正彦さんは、「日本は、今、六番目の危機を迎えている」と、仰（おっしゃ）いました。　その五番目の危機である戦後を乗り越えて、目覚しい復興を遂（と）げ、高度経済成長を成し遂げたのは、明治維新に続いて二回目の「奇跡」といえるでしょう。　しかし、余りにも駆け足で登りつめた負の産物として、私は、日本人が大切にしてきた、三つのバランスが、失われているように思います。　日本人が大切にしてきたバランスは、五円玉のデザインに象徴されています。

◇日本は、「課題克服先進国家」、課題克服のフロントランナーであります。　その三回目の奇跡を起こすために必要なのは、前述した「三つのバランスの回復」です。　さらに、大切なのは、「希望」の共有ではないでしょうか。　「きっとよくなっていくんだ」という希望を持ち続け、そのモチベーションを維持し、その希望を共有する人々を増やしていくことではないかと思うのです。　労働人口は減少しても、「希望活動人口」を増やすのです。

◇私は、その「希望活動人口」とは、東大神野教授の提唱された「地域力」に通ずると思います。　ローカルアイデンティティ、何が何でもこの彦島なんだという「帰属の力」です。　そして、地域を越えた広い交流を通じて、共通の問題としてみんなで取り組む、「参加の力」です。　そして、運命共同体としての絆を深めつつ、創意工夫をして生活を共にする「共生の力」です。　これからも、希望を共有できる神社の運営、希望活動の運命共同体としての地域社会の構築に尽力したいと思います。　五円玉のデザインという理想に近づきたいものです。

◇その五円玉は、真ん中に穴が開いています。　目に見えない大きな力、光が差し込む穴だと考えます。光が当てられるから陰が出来るのですから、「お陰様」ではなく、「お光様」です。　そして、なにより、神様や大自然、御先祖様、地域の人々とつながる、ご縁の穴でもあります。　日々是好日（にちにちこれこうじつ）、穏やかで良い日でありますように。

第一〇四号（平成二十七年六月三十日）

◇五風十雨（ごふうじゅうう）」という言葉ご存知でしょうか。　五日に一度風が吹き、十日に一度雨が降ることで、転じて、風雨その時を得て、農作上好都合で、天下の太平なことです。　天下太平の天候ではないということを自覚する必要がありそうです。　私共も、来るべき大きな災害に備えなければなりません。

吉田松陰先生は、「備えとは武器にあらず　心構え」と唱えられ、その心構えこそ「大和心（やまとごころ）」であると説かれました。　大いなる和（やわ）らぎで、日本人の持つ、やわらいだやさしい心情です。

◇日本画家の堀文子さんも、「日本は災害の多い国ですが、それが人を思いやる心や惻隠（そくいん）の情、無常観といった美意識を養ってきた。　苦難を乗り越えた先には、次の発展がある。」と述べられています。

◇ケネディ大統領の「日本が敗戦から早く復興できた秘密は何か」という質問に、当時の外務大臣、後の首相となった大平さんは、「災害が多いこと」を挙げられました。　「日本人は耐えて、克服し、災害前よりは日本をよくするんだという気概を持ってきた。この力こそが復興の原動力だ」と答えられたそうです。

◇葉室麟（はむろ　りん）著作の「風花帖」という本を読了しました。　主人公は、「お主は、清く生きようとしずぎる。　人は、どれほど汚れてもよい生き物だとは思わぬか。」とある人から言われます。　主人公である印南新六は、「思うております。　天から降る穢（けが）れなき雪も地に落ちれば泥になります。されど、落ちるまでの美しさは、人の心をなごめ癒（いや）してくれます」と答えたのです。　まさしく「風花」の美しさ潔（いさぎよ）さの生き方なのでありまして、感激のあまり落涙しました。　地に落ちて泥にならない、落ちるまでの美しさ「風花」に近づく日々を送らなければと思いを新たにしています。　「五風十雨」の天下太平を祈り、「大和心」を忘れずに、「よくするんだ」という気概、「きっとよくなるんだ」という希望を共有する地域社会、それこそが、大きな災害への「備え」となるはずです。

第一〇五号（平成二十七年七月三十一日）

◇今年は、終戦七十年でありますが、その七十年の最初の十年は「キャッチ　アップ（追い付くことです）」の期間だったそうです。　実は、戦争で破壊されたのは、工場や鉄道、住宅などのハードウェアといわれています。読み書きそろばん能力や、規律性や勤勉さなどの日本人の特性ともいうべきソフトウェアは、破壊されなかったのです。　日本の長い歴史の中で、戦（いくさ）や内乱のない平和な時代、ラテン語で平和を意味する「パクス」、日本を意味する「ヤポニカ」で、「パクス　ヤポニカ」という時代が、二回ありました。　平安時代から保元（ほうげん）の乱までの三百五十年間と江戸時代の二百五十年間です。　その二回目の「パクス　ヤポニカ」である江戸時代に、前述した卓越した日本人らしさともいうべきソフトウェアが培われたように思います。

◇八代将軍吉宗の享保年間には、江戸幕府の三大改革といわれる「享保の改革」がなされて、社会秩序が重視されました。

◇庶民にも読み書きそろばんが広がり、日本人の識字率（しきじりつ）は、高水準になっていきました。　日本の最初の奇跡といわれた明治維新、読み書きができた人の割合は、当時の英国をもしのいでいたそうです。　戦争中に生徒が疎開するとき、まず持っていったのは教科書、敗戦直後の食料や家がなくても、学校には通わせました。　日本人の特性、日本人らしさが失われなかったのです。　そのことが、良質な労働力につながり、いちはやく経済が回復し、「キャッチアップ」したのです。　二回目の奇跡である、「戦後復興」を成し遂げる原動力となったと思います。　作家で経済評論家の堺屋太一さんは、「三番目の日本」を作ろうと言われています。　一番目は、明治時代の目指した「強い日本」。　二番目は、戦後の「豊かな日本」。　三番目は、「楽しい日本」にすると提唱されています。　そうしないと少子化は克服できないそうです。

◇これからも、二つの祭典を真心こめて御奉仕申し上げながら、運命共同体としての「楽しい地域社会」が築いていけるよう努力したいと思います。

回 第一〇六号（平成二十七年八月三十一日）

◇台風一過（たいふういっか）、凌（しの）ぎやすい昨今です。「天災は忘れた頃にやって来る」、これは、夏目漱石さんの門下生で物理学者の寺田寅彦（てらだ　とらひこ）さんの言葉だとされています。　その寺田寅彦さんは「ものを怖がらな過ぎたり、怖がり過ぎたりするのはやさしいが、正当に怖がることはなかなかむつかしい」とも述べられました。

◇大自然は、時には甚大（じんだい）な災害を引き起こしますが、花を咲かせ実り、豊かな恵みを与えてくれるのです。天地（あめつち）の恵みを恐れ敬い、今ここにある命に感謝し、感謝の心をつなぎ、運命共同体としての地域社会を築き上げていかなければと思います。　まさに、「天恐地敬人愛（てんきょうちけいじんあい）」です。

◇寺田寅彦さんの師匠である夏目漱石さんは、晩年に、「則天去私（そくてんきょし）」という言葉を残されています。大自然に身を委（ゆだ）ね、私利私欲をかなぐり捨てて生きていく、これが、「則天去私」です。　天恐地敬が、まさに、則天であり、人愛が、去私になるのだと思います。　つまり、寺田寅彦さんの仰った、正当に怖がる心構えが、「天恐地敬人愛」で、その生活の目当てが、「則天去私」なのではないかと考えます。　損か得かは、やはり、「人間のものさし」なのです。　真実か偽りか、うそか誠か、正義か邪悪かという、「神様のものさし」で生活をする事が大切です。　その「神様のものさし」の生活こそが、「天恐地敬人愛　則天去私」なのではないでしょうか。　その「神様のものさし」の生活が、私は、神様、大自然、ご先祖様、地域社会とつながり、共に生きる「共生」だと思います。　日本最古の歴史書である「古事記（こじき）」には、「共生」は、共に生きるのではなく、共に生むと書かれているのです　共に生きるのが、現状維持であるとするならば、共に生むのは、新しいものを作り上げていくことになるのではないでしょうか。

◇「楽しい日本」をつくるには、共に生き、現状維持をはかりつつ、共に生む、新しい歴史文化を生み出す、「共生」が、必要なのではないでしょうか。

回 第一〇七号（平成二十七年十月十六日）

◇明日と明後日は、年に一度の秋季例大祭を斎行いたします。　この例大祭の一番の御利益は、いったい何であろうかと思われますか。　江戸時代の中期に、伊勢の神宮の外宮（げくう）の神主であった、中西直方（なかにし　なおかた）さんは、宝永四年西暦一七〇七年に著した「死道百首のなかに、

「日の本に　生れ出にし　益人は
　　神より出でて　神に入るなり」

と詠んでいます。　人間の生命も、生きようとする意志も、広く見れば神様が、お与えになったものなのです。前述の中西直方さんの師匠でもあり、やはり外宮の神主であった度会延佳（わたらい　のぶよし）さんは、「人間は神から神性を受けて生まれた存在だから人間の本性を損なうことをしてはいけない。　誰もが、神から賜った本性を基準とした生き方をせよ」と説いています。

◇第九十六代後醍醐天皇（ごだいごてんのう）は、

「みな人の　こころもみがけ　千早ぶる
　　神のかがみの　くもる時なく」

と詠まれています。　後醍醐天皇は、神の鏡が曇る時がないように、人も心を磨いて変な色にそめるな、曇らせてはならない、そのような心を持てるようつとめなさいと説いています。　神様に向き合いますと、曇りのない鏡を見るわけですから、神の心に照らして反省の念を常に持つことが、自分の心の汚れを毎日、ふきとることになるのです。　まさに、本性を損なわない心構えです。　日々、月々、季節毎の「祭り」は、心の炭酸ガスを吐きすてて、神様の元気を吸うという、いわば、呼吸です。　そして、一年に一度の秋季例大祭は、「深呼吸」なのです。　今ある命に感謝を捧げることができて共々に手をたずさえて深呼吸ができる、私は、このことが、明日と明後日の例大祭の一番の御利益だと考えます。　神性を受けた存在である本性を取り戻し、損ないを軌道修正し、その正しい本性を基準とした生き方をすることをお誓いするのが、「祭り」なのです。

回 第一〇八号（平成二十七年十一月九日）

◇上智大学渡名誉教授の渡部昇一先生は、誇るべき日本人としてのDNAとも言うべき国民的精神は、自然観と宗教観、そして、労働観であるといわれました。　その国民的精神のことを生物学用語である、「刷り込み　インプリンティング」とおっしゃいました。　日本人が、生れた時から備わっているはずの精神なのです。

◇明治学院大学武光教授の著作には、神社神道には、自然を大切にする、人を大切にする、そして、明るい気持ちを以って人生を楽しむという三つの教えがあると書かれていました。　その三つの教えと、前述（ぜんじゅつ）の渡部名誉教授の「日本人の刷り込み」は、神社信仰の三本柱にぴったりと符号（ふごう）します。　神社信仰の三本柱とは、稲と家と御先祖様です。　神仏先祖に感謝を捧げ祈り、運命共同体としての結束を深めつつ、どんな時にも必ずお守りくださることを信じる「神信心（かみしんじん）」という、勇気を忘れずに「日々是好日」を願って、過ごしてきたのです。

◇宮司プレス第百六号で、「共に生き、共に生む、共生」について詳しく記載しました。　共生こそ、神社信仰の三本柱の根底に、脈々と受け継がれてきたのではないでしょうか。

◇エコノミストの吉崎達彦さんによると、日本の国運について、四十年周期説なるものがあるそうです。　一、八六八年の明治維新から一、九〇四年の日露戦争までが、上り坂。それから一、九四五年の第二次世界大戦終戦までが、下り坂。　戦後から四十年間は、再び上り坂でした。つまり昭和六十年こそが、日本人が最後に「坂の上の雲」を仰ぎ見た年だったということになります。　しかし、その周期説によると、これから先の十年後、東京オリンピックを経て上り坂になるはずです。　今が、正念場です。毛利元就は、「人生には三つの坂がある。　上り坂、下り坂、真坂だ。　真坂の時にどう生きるかによって、上り坂下り坂に別れる」とおっしゃいました。

◇日本人の国民精神を誇りに、神社神道の三つの教えを守り、上り坂になりますようつとめたいものです。

社務日誌抄

（本宮祭典厳修報告）
―平成二十七年七月～十二月―

▼文　月（七月）

二十九日　**夏越祭前夜祭・菅抜神事**

＊当宮では水無月の大祓に加え夏越の大祓も執行しています。カヤとヨモギで奉製した茅ノ輪を潜り、分魂を宿らせた人形を焚き上げる古式。罪・穢れを祓い清めました。

当宮では水無月晦日より一ヶ月の間に計三度奉製致します。

三十日　**夏越祭御神幸祭**

＊御祭神の御霊を奉じた御神輿が氏子地域を中心に陸上海上を隈なく御神幸しました。渡御は西日本有数の郷土神事です。

▼葉　月（八月）

十一～十六日　**神道家中元祭斎行**

＊上元（一月十五日）中元（七月十五日）下元（十月十五日）を先祖供養の日と定めた「みたま祭」の故事に肖り、日本人に親しみある盆行事の一環として毎年斎行致します。

▼長　月（九月）

二十三日　**秋分祭秋季祖霊祭**

＊「祖先を敬い、亡くなられた人々を偲ぶ日」という秋分の日にちなみ、日毎ご加護をいただいている祖霊慰めの祭儀を斎行致しました。

二十七日　**観月祭**

＊日本酒と共に名月を愛でながら、日本の風土、豊かな四季を大切にしてきた伝統的な日本人の「こころ」に思いを馳せました。

▼神無月（十月）

十七日　**神嘗奉祝祭**

＊伊勢の神宮で新穀が奉られ五穀の豊穣に感謝の祈りが捧げられました。この祭典を奉祝し当宮におきましても厳粛に斎行され、神宮を遥拝致しました。

秋季例大祭前夜祭

十八日　**秋季例大祭本殿祭御神幸祭**

＊神社本庁より幣帛が奉られ、一年に一度の大御祭が斎行されました。当宮創祀者の河野通次を偲び、八五六年伝統の無形民俗文化財指定「サイ上がり神事」も厳かに執り納める事が出来ました。

▼霜　月（十一月）

三日　**明治祭**

＊戦前の明治節にあたり、四大節（紀元節、四方節、天長節、明治節）の一つです。明治天皇様のご生誕とご聖業を讃えるとともに、ご皇室の更なるご繁栄を祈願致しました。

十五日　**七五三祭**

＊お子様の成長をご祭神へご奉告し、ますますの健やかな成長を月次祭に併せお祈り申し上げました。

二十三日　**新嘗祭**

＊天皇陛下が五穀の新穀を天神地祇（てんじんちぎ）に勧め、また、自らもこれをお食しあそばされて、その年の収穫を感謝する古来より伝わる稲作儀礼の祭儀です。宮中三殿の近くにある神嘉殿にて執り行われます。当宮におきましても、新穀をご祭神へお供え致し、収穫を神恩に感謝申し上げ、厳粛に執り行いました。

▼師　走（十二月）

六日　**大注連縄奉製・煤払式**

＊神域と外界とを隔てる拝殿大注連縄の奉製が執行され、本年刈り取って干した稲藁を使用し、青々しい立派な大注連縄が掲げられました。終了後、煤払式を執行し一年間の汚れを掃き清めました。

二十三日　**天長祭**

＊今上陛下の御誕辰を言祝ぎ更なる皇室の弥栄をお祈りする祭典です。天長祭とは、古来、唐の玄宗皇帝の誕生日を天長節と祝った事に由来します。天長とは老子の「天長地久」という言葉に由来し「天にとこしえなる事」の意を含んでいます。

三十一日　**大祓式**

＊私たちが日常生活のなかで、知らず知らずに犯してしまった罪穢れを人形（ひとがた）に託して身体を清め、心新たに新年を迎え生活を営むべく心技体を整えます。

新守札清祓式
除夜祭

訃報

責任役員・サイ上がり神事　止役
和田光治氏　逝去
謹んでご冥福をお祈り申し上げます

夏越祭奉納グラウンドゴルフ大会

七月十九日（日）於、江浦小グラウンド

①原要、②井上輝、③田中タエ子、④花屋教治、⑤藤田武

秋季例大祭祭奉納グラウンドゴルフ大会

十月五日（日）於、江浦小グラウンド

①横山美代子、②梅田泰敏、③穐吉英起、④花屋教治、⑤山口富士夫

第四回彦島八幡宮杯争奪ソフトボール大会

十月二十五日（日）

◆一部・三部＝三菱重工業グラウンド
◇二部＝向井小グラウンド

▼一部　優　勝（レッドブル）
　　準　優　勝（チームZERO）
▼二部　優　勝（BETTS）
　　準　優　勝（しんせい’S）
▼三部　優　勝（BBクラブ）
　　準　優　勝（向井町ソフトボールクラブ）

彦島八幡宮　検索

平成28年　年頭のご挨拶

下関市長　中尾友昭

新年明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、平成28年の新春を健やかにお迎えのこととお慶び申し上げます。

さて昨年を振り返りますと、ノーベル生理学・医学賞と物理学賞での相次ぐ受賞や日本中が沸きたったラグビーワールドカップにおける歴史的な勝利、北陸新幹線の開業やマイナンバー法の施行など新たなステージが開かれた年でありました。

本市においても、1月の「下関市住民自治によるまちづくりの推進に関する条例」施行を端緒に、2月に新市誕生から10年の節目を迎え、4月には「第2次下関市総合計画」がスタートするなど、「輝き海峡都市　しものせき」の実現に向けて、順調に新たな一歩を踏み出すことができました。

今年は、「住民自治のまちづくり」がいよいよ実施段階を迎えます。本格的な地方分権の時代、行政のみならず、市民の皆様が自発的に課題を発見、解決する、あるいは地域と行政が連携し、地域力を創造することができる新たな仕組みが必要不可欠です。ぜひ皆様のお知恵や貴重な経験を地域のためにお役立ていただき、今後の下関の発展へとつなげていただきたいと思います。市といたしましても、「まちづくり協議会」への支援等、共に頑張ってまいります。

また、「下関」という都市そのもののブランド化を最終目標としたシティプロモーション推進事業では、従来の行政的な手法にとらわれない柔軟な発想で、SNS等を活用した様々な展開を行い、下関ファンの獲得、そして情報発信力の強化に努めております。2月には、より充実したサイトにリニューアルし、市民の皆様とともに、「下関」の情報発信に努めてまいります。

さらに、3月には「火の山ユースホステル」がリニューアルオープンします。バリアフリー対応の特別宿泊室を設けたほか、客室全室から関門海峡の眺望が楽しめる設計となっております。「国、世代にとらわれず、人々が集い語らう憩いのコモン（共有）スペースのある建物」をコンセプトにしており、従来の客層である若い世代だけでなく、あらゆる世代の方にご利用いただきたいと考えております。また、本市の教職員の研修・研究機能や教育相談機能及び教育委員会事務局機能を併せ持つ「教育センター」が竣工・供用を開始します。今秋には、日本有数の歴史の舞台となった本市にふさわしい文化施設として新しい市立博物館がオープンします。人々が集い、歴史を語り、地域を考え、次世代に継承していく未来志向型の歴史文化観光拠点にしてまいります。

誇るべき地域資源を数多く持つ下関市は、県内唯一の中核市として、地域の活性化を牽引する役割を担っています。次の世代、その次の世代にも安心して暮らせる豊かな地域を引き継いでいけるよう全力で取り組んでまいりますので、今後とも市民の皆様のあたたかいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本年が皆様にとって良き年となりますよう心から祈念申し上げ、年頭の挨拶とさせていただきます。

祭事暦（平成二十八年上半期）

皆様お誘いあわせの上、お気軽にご参拝下さい。

睦月（一月）

一日　初太鼓　歳旦祭

三日　元始祭

天皇陛下御親ら宮中三殿【賢所（かしこどころ）、皇霊殿、神殿】において皇位の始源を祝し親祭あそばされます。当宮においても皇位を祝寿する祭祀が執行されます。

十五日　成人祭（月次祭）

十七日どんど焼き

＊注意＝正月飾は当日正午以降は受付致しかねます。ご持参されても お受けできませんので予めご了承下さい。

如月（二月）

三日　節分祭追儺式

十一日　紀元祭建国奉祝祭

我国の初代天皇である神武天皇が橿原宮で即位された古えを偲び、建国創業の御神徳を景仰し、皇室国家の弥栄を祈念申し上げます。

十七日　祈年祭

「としごいのまつり」本年の五穀豊穣と皇室・国家の弥栄をご祈念申し上げます。

弥生（三月）

二十一日　春季祖霊祭

家の宗旨が神道の方の合同の先祖慰霊祭。

「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」という春分の日を迎えるにあたり、自然万物に感謝の祈りを捧げる祭儀を斎行致します。

卯月（四月）

二十九日　昭和祭

激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、我国の将来に思いを馳せ、昭和天皇陛下のご聖徳をお讃え申し上げますとともに、ご皇室の弥栄と国家の繁栄を祈念致します

皐月（五月）

水無月（六月）

三十日　大祓式

節分祭のご案内

二月三日（水）

●福引大会　午前一〇時～午後七時三〇分

●豆まき①午後六時三〇分　②七時三〇分

●ぜんざいふるまい・露店出店

★第二回豆まき奉仕者募集

午後七時より合同にて特別祈願斎行後、豆まき奉仕をしていただきます。

※詳細は社務所までお問い合わせ下さい

〈初穂料五千円〉

方位除け祈願祭のご案内

年間を通して受付

●金神除け（こんじんよけ）

引越し、旅行、家の増改築、出張、転職等々、行く方向などをご祈願お祓いするものです。

●八方塞り除け（はっぽうふさがりよけ）

平成二十八年の八方塞がり該当は本命星が「二黒土星」の方です。

舟島神社例祭・佐々木小次郎大人命慰霊祭のご案内

四月十六日（土）午前一〇時　於、巌流島（船島）

本年は決闘より四〇四年。小次郎大人命を偲んで決闘や巌流島に纏わる御神楽や剣舞が奉納されます。

●ご参列、拝観自由

田の首八幡宮

総代長　濵畠　翔平

田の首八幡宮は、三九一年（明徳二年）に彦島八幡宮より勧請祭祀され創建されたとの記録があります。本年で六二五年を迎えます。

長い間、田の首の海岸辺の貴船山に祠（ほこら）として鎮座、その間「鎮守の杜」として人々は疫災等から守護を受け、又、地域の人々の心をつなぎ、絆を結び、心のよりどころとなるものとして熱心に信仰、敬愛され手厚く守られてきました。又、吉田松陰先生が一八四九年七月お立ち寄りされたそうです。（吉田松陰・海防巡検日記より）

社殿は明治時代頃、当時の田の首町民の団結心、自尊心から、この地にも立派な社殿を建築するものとの気運が出て、念発起、一丸となって建築したものと聞いております。

その後社殿は、今の南公園海岸近くの高台に移されて、昭和二八年二月宗教法人として神社本庁の管轄となり、昭和四三年七月、林兼造船所の事業拡張に伴い、再々移転、現在の向井小学校下の関門海峡を見下ろす高台に落ち着きました。更に、昭和六三年五月、お宮の名称を、「八幡宮」から「田の首八幡宮」と登記簿上変更され、今日に至っております。

御祭神は、仲哀天皇、応神天皇及び神功皇后の三神であります。

武神として崇められ、更に造船業、漁業関係者の崇敬厚く又、安産、商売の神として、御霊験あらたかな神様であります。

境内は、雑木林に囲まれ、多種類の樹木が茂っています。暖かくなりますと、にぎやかな小鳥のさえずりが聴こえます。又、時に八幡様の使者として、ハトの一群が寄ります。南のほうに目を転ずれば、田の首町の家々、関門海峡、北九州市の街や山が見晴らせ、年中移り変わる景色を楽しめます。又、明治時代の大砲の空のたまが祀ってあり、実物を見ることができます。

更に平成二四年一月、宮の屋根瓦の大部分を、老朽化の為、差替えましたが、その際の古い鬼瓦他、装飾瓦、龍神の瓦が展示されています。

田の首八幡宮における年中行事（祭）

(1)一月一日　歳旦祭、一月中旬　どんと焼き

大勢の初詣客が参拝する中、宮司さんにより皇統繁栄、国民の加護、五穀豊穣を祈念し、更に正月しめ飾りを燃やしぜんざいを振る舞います。

(2)二月二十七日　祈年祭（大祭）

一年の五穀豊穣を祈ります。

(3)七月二十四日　夏越祭

大祓い、茅の輪くぐりを行います。

(4)十月中旬の土日　秋季例大祭（当宮最大の祭）

お神輿の町内巡幸、ぜんざいを振る舞います。

(5)十二月二十三日　奉告祭

鳥居のしめ縄を新旧取り替えます。

田の首八幡宮は、鎮守の杜として地域の人々との触れ合いを大切に考えてまいりました。今後も引き続き、人々から愛される神社であり続けることを願っております。

六連島八幡宮

総代長　目黒　一彦

御祭神は応神天皇、仲哀天皇、神功皇后。六連島八幡宮は、明和四年二月豊浦郡幡生村八幡宮「現下関市幡生生野神社」より勧請されました。

一月十一日に歳旦祭が執行され、各戸の代表がお宮に参り拝殿にある二基の長方形の囲炉裏の炭火を囲んで御神酒を戴きながら賑やかな時を過ごして一年の宮籠りの始まりです。当日各戸の神棚の前で、家の清祓と家内安全を祈る戸別祓いがあります。

七月は宮籠りが多くあり、植付籠り、山の神様籠りと続いて宮籠りとなります。

秋には例祭があり、氏子を三つ分けて毎年一組が祭りの御世話を致します。十月朔日に注連縄を作り、四日の前夜祭では「湯立神事」があります。大鍋を三又の枠の上に据え、古い御札や御室等を焚き上げ湯を沸かし御供えします。五日の御神幸祭は、参道沿いに日の丸と四本の幟が立ち、年に二度、御神殿より神様を御旅所までお供奉り御心を慰め申し上げ、この六連の里をお護り願う行事です。平成十九年に幟を新調するまでは、出征した氏子の方で、無事に故郷の地を再び踏んだ方々が奉納された幟を使用していました。昔、母から聞いた話では、戦地に向かう兵隊さんが、島の前を通る時、船上から八幡宮に願い事をしたところ多くの方々が無事に帰還できたと、御礼参りに来島されたそうです。

時代は変わっていく中、昔も今もこれからも神を敬う気持ちは続いていくと信じて止みません。

福浦金刀比羅宮

福浦金刀比羅宮総代　榊　教夷

日本一と言われる急傾斜の階段を登ると福浦金刀比羅宮の社がある。眼下には福浦湾が周囲は関門海峡へと広がっている。皆さんはご存知ですか。登られたことはありますか。階段の横には鎖があるので、足に自信がない方もゆっくり登ってみてはいかがですか。

私はとても一気には登れないが、何度か休み呼吸を整えながら登ると、眼前に林に包まれた社殿がひっそりとした佇まいで、霊気が漂いホッとした爽やかさに落ち着きを感じる。子供の時から「こんぴらさん」といって親しみ、唯一の遊び場であった。

よくこの階段は何段か訊かれるので二六九段と答える。しかし殆どの方が二七〇段二七一段、二七六段など様々で、この頃はいちいち訂正しないことにしている。

彦島の民話に福浦の「こんぴら狐」があり、よそから来た人が、何回数えて登っても、登りと下りの数が違う。八合目あたりで狐に騙されたという話である。富田義弘さんの「ひこしま昔ばなし」にはこのことが面白く書かれている。

福浦金刀比羅宮は文政三年（一八二〇年）長府忌の宮神社より勧請し現在の地（兜山）を開拓して遷座したもので、文政三年（一八二〇年）諸施設の総てが完成し、一〇周年の式年大祭を行い、以後一〇年毎の式年大祭と毎年例祭を行い、今年は一八六年例祭を執り行った。

金刀比羅宮の社殿の横に儒学者「小田圭」による富観台記の石碑がある。碑文は総て難しい漢字ばかりで書かれているが、碑文の一部には、台は海中にそびえ立ち、三面海を見わたせるとあり、室津崎、六連島、蓋井島、南の方は蒼く連なる筑豊の山々、小倉城、大里、田の首等の名前がある。富観台という名の通り素晴らしい眺めであるとあるが、現在は周囲は随分変わっており、木も茂って木々の間から見ることはできるが上望は出来ない。

嘉永二年（一八四九年）に吉田松陰先生は海防踏査の為に金刀比羅宮に登られたことが「廻浦紀略」（海防巡検日記）に記されている。それによると、台場は未だ築かれてなく、燈籠堂、小田圭の碑文あり、当時は階段も完成しておらず、二六〇段余り、完成すれば二〇〇段くらいにはなるであろう。階段づくりや燈油の費用の出どころなどを尋ねている。

日本周辺は早くから外国船の出没が目立ち始め、幕府の「打払令」が出るなど、まさに内憂外患という時代である。五卿の三条実美が福浦、弟子待の台場を巡察しているので、金刀比羅宮に登られたかもしれない。

「馬関覚え帳」や「彦島大観」等の古い書物によれば、福浦港は北前船の西回りの日本海への最後の風待ち、汐待ちの寄港地として非常に栄えた。船舶が多い時は一〇〇隻を超え、港を埋め尽くし、遊女は二〇〇人以上、夕方になると三味や太鼓でにぎわった。その頃の人家は二五〇戸位あり、江の浦町、その他でも四、五〇戸に過ぎず、彦島の首都であった、と書かれている。船・艘から米一升寄進させ、お宮の費用維持に充てたようである。

福浦金刀比羅宮はこの栄枯盛衰と共にあり、これまでに多くの先達がお宮を護り、祭事を執り行ってきた。社殿その他の施設も年々傷みがひどくなり、神輿を担いで海へ入ったり、神輿を揉み練り歩く勇壮な祭りも、高齢化と若者の減少により、非常に困難になってきた。時代とともに祭りの有り様も変わるけれども、これからも由緒ある金刀比羅宮の伝統を受け継ぎ若い人や子供たち伝え、地域の方の篤い信仰や、心の拠り所として多くの方々の御協力を得てお宮を護り続けていく覚悟である。今後とも、これまで同様に彦島八幡宮のお力添えを戴きたいと切に願う次第である。

彦島八幡宮　検索

竹の子島金刀比羅宮

竹の子島町　瓜生　基輝

先ずは、この度、彦島八幡宮社報『産土』に寄稿の栄を賜りましたことに、御礼申し上げます。竹の子島金刀比羅宮の紹介、それにまつわるエピソードや現況とのご依頼でしたので、まずは紹介から…。

竹の子島町の金刀比羅宮については、社殿の前に由来が書かれていますが、さかのぼること文政三年三月萩の人、宮辺道右衛門が建立したもので、例祭日は四月十日です。長きにわたってこの日を守って例祭を行ってきましたが、竹の子島の住民がだんだんと減っていくのと、会社勤めが増えたことで、平日の開催が難しくなってきて、現在は四月の第一土曜日に前夜祭、翌日曜日に本殿祭、御神幸祭となっています。本殿祭は前直会が特徴で、祭典の前に直会を済ませます。御神輿は本殿前の石の階段を下より伊勢音頭に合わせて登っていきます。一節終わるごとに「ごきとう、ごきとう」と掛け声を掛けて少し急ぎ足で上がります。本殿到着まで何回か繰り返されます。各家庭では、招待客に酒肴を振る舞うしきたりがあり、御神輿の巡行を、少し顔を赤らめたお客さんや家の人が玄関先や窓越しに覗き込んでいる姿はほのぼのして、ある意味滑稽でもありました。今では、お客さんを招待している家庭は僅かになってしまいました。御神輿の担ぎ手も、既に島の住民では足りなくなり、知り合いなどに声を掛けて人数集めをしています。子供神輿は、今年は五人になってしまい、出すことが出来ませんでした。しかし、やはり島をあげてのお祭りであることは変わりなく、粛々と続けています。

それから、竹の子島の金刀比羅宮には天神さん（太政大臣菅原道真公）も祀られています。七月十五日には、彦島唯一の天満宮の祭事である天満宮例祭を行っています。

金刀比羅宮のご利益は、海上安全・大漁満足・家内安全・学業成就・産業繁栄が言い伝えられ、今でも島民は何かにつけてお参りしています。

島民はだんだん少なくなっていき、私が幼い頃とは祭りの様子も変わってきましたが、先祖代々大切に祭られてきた金刀比羅宮は、これからも祭りを通して皆で末永く、大切に守っていきたいと思います。そして、祭りの時だけでなく、日々「御先祖様に守られている」という感謝の気持ちも忘れることなく、今の私たちが後世に伝えていかなければいけないと思っています。

貴布禰神社

老二町　徳増　昭和

彦島ロータリーから、海士郷方面へ車で約二分、老町一丁目の小高い丘の上に、貴布禰神社が鎮座しております。大鳥居を潜り八十段の石段を上りきったら、後ろを振り向くと下関漁港が一望出来ます。漁港が賑やかな頃を偲びながら、毛利家から拝領の御門を潜ると眼の前に、拝殿が現れ、大きな広場（昔相撲が行われていた）を通り、又四十段上りきると、当神社に辿り着きます。拝殿の前左右に、造りの違った狛犬が一対配され、又右横側には、稲荷の祠も鎮座しております。この貴布禰神社は、彦島八幡宮の末社にして、弘安三年（西暦二二八〇年鎌倉時代後期で蒙古の襲来　元寇の役が起こった時）三月老町の鎮守社として建立され、祭神は保食神（うけもちのかみ）、高麗神（たかおかみ）で毎年九月秋彼岸の中日に例祭が行われ「牛の宮」の祭りと、称せられ、素人相撲が奉納されることが有名でした。「牛の宮」の名称は祭神の守護神であるからと言われています。現在の社殿は大正十五年六月に改築竣工落成されたものです。当神社の最初の神事は元日から始まります。午前六時柴田宮司より、祓詞があり修祓を行い、歳旦祭の祝詞奏上が行われます。そして、その年の干支について及び道標等為になる講話を頂き御神酒を拝戴致します。そして終わる頃になりますと晴天の日は、対岸の門司　風師山の頂より朝日が昇り始め参拝者一同今年一年良き年でありますよう、祈念致します。

秋の例大祭は秋分の日に斎行され、地域住民の方々が参列致します。本殿には鯛をはじめとする海産物、新米、酒、野菜、果物など御馳走を供えます。数年前まで、前夜祭には子供踊りや大人の平家踊り等又、くじ引き、バザー、露店も出ており大変賑やかに楽しく行われ、翌日本殿祭には御神幸祭も執り行われておりましたが、昨今「少子・高齢化」により参列者も減少をきたし現在では、神事のみ斎行されております。そして、老町住民の氏神様として、毎月本殿・拝殿及びその周辺の清掃活動を行っています。往時より現在に至るまで地域住民の皆々に受け継がれておりますが、いついつまでも若い人達の力で継承される事を切に祈念している今日この頃です。

塩竈神社（俗称塩神様）

塩浜町三丁目　髙橋　勉

当神社は、彦島塩浜町二丁目塩浜町民館（塩浜市営住宅）横の広場の一郭に鎮座しております。

塩田と塩神様の由来

塩田は、江戸時代に入って開設（明治四十二年発刊の彦島土産では百四十年前と記述）され、長府藩に所属、入浜式塩田で当初は八軒浜、のちに二軒浜（町六反余り、約二万九千㎡）となりました。

明治四十四年（千九百十一年）第一次製塩業整備で廃業しましたが、経営は厳しく、持ち主も幾度か変わっており、廃業二年前の様子を「現時は高田式大釜を据えて、一釜二百斤（百二十kg）制出来高があり、一昼夜一〇釜の割合で、一釜に要する燃料の石炭は二十三振（三百六十八貫　一三八〇kg）であり、浜子は常傭一〇人なるも夏季は四人増加するはずである。」と記述されています。

塩神様は、塩田守護神として、宮城県塩釜市一森山に鎮座する塩釜神社より、福浦湾沿いの竜宮山（別名りんご山）にご分霊をご謹請祭祀されたと言い伝えられています。

塩田は、廃業になっても地域住民に守られ崇敬されてきました。

町名も塩浜町に決められ、また、戦前までは日本専売公社の輸入岩塩倉庫が立ち並び、船からの荷揚げ、梱包、国内向け船積みで活況を呈しおり、塩との縁は極めて深いものがあったようです。

戦後しばらくして、竜宮山は民間に払い下げられ、塩神様遷祀を前提に、現塩浜町民館周辺用地が塩浜町自治会に寄贈されました。

塩浜町自治会は、下関市に土地の大半を売却、その費用で市営住宅一階部分に立派な塩浜町民館や基金が残され、今日私達塩浜町民はその恩恵に預かっているところです。

塩神様の行事、その他

例祭は、毎年五月の上旬に行われますが、例年の行事として、年末に塩神様の注連縄を作製して年始に備えております。

五月の例祭時には、塩神様周辺の清掃と塩神様の周囲に注連縄を張り巡らせて、お供え物をして例祭に備えます。

斎主は、彦島八幡宮にお願いしており、当例祭のお世話は、塩浜町の四自治会が一年おきの順番制で行われております。

小さな形の塩神様ですが、塩浜町の守り神であり、町民の心の拠り所です。

いつまでも末永くお守りしていかなければとの思いでおります。

＊参考文献　平成十年五月発行
塩神様例祭案内より

平成28年（丙申）　厄年・年祝表

（年祝）

上寿祝	大正 6年生（100歳）	数え年100歳のお祝い。
白寿祝	大正 7年生（99歳）	百から上の一を取ると白になり、数で云えば99である。
卒寿祝	昭和 2年生（90歳）	卒は略字で卆と書き九十と読む。
米寿祝	昭和 4年生（88歳）	米は字をわけると八十八となる。
傘寿祝	昭和12年生（80歳）	傘は略字で 八十 と書き八十と読む。
喜寿祝	昭和15年生（77歳）	喜は草書で 七七七 と書き七十七と読む。
古稀祝	昭和22年生（70歳）	「人生七十古来稀なり」の漢詩にもとづく。
還暦祝	昭和31年生（61歳）	干支が丁度一巡し、誕生の年と同じになるので本卦返りともいう。

（厄年）

性　別	年　齢	前　厄	本　厄	後　厄
男	25歳	平成 5年生（24歳）とり	平成 4年生（25歳）さる	平成 3年生（26歳）ひつじ
	42歳	昭和51年生（41歳）たつ	昭和50年生（42歳）うさぎ	昭和49年生（43歳）とら
	61歳	昭和32年生（60歳）とり	昭和31年生（61歳）さる	昭和30年生（62歳）ひつじ
女	19歳	平成11年生（18歳）うさぎ	平成10年生（19歳）とら	平成 9年生（20歳）うし
	33歳	昭和60年生（32歳）うし	昭和59年生（33歳）ねずみ	昭和58年生（34歳）いのしし
	37歳	昭和56年生（36歳）とり	昭和55年生（37歳）さる	昭和54年生（38歳）ひつじ

（八方塞がり）

皆様一人一人の生年月日により九つの星“九星”に区分され星回りが存在します。中央を基点に、北、北東、東、南東、南、南西、西、北西の方角をめぐり、九年に一度中央に入ります。これが八つの星（方位）に囲まれた状態である八方塞がりです。不安定な年とされ、より注意をしなくてはならいない年です。

八方除けの祈願や方位除けの御守をお受けになられ、御神慮を恐み慎む事をお勧め申し上げます。

本年は二黒木星の方が該当致します。（＊以下に表記）

大正6年、大正15年
昭和元年、昭和10年、昭和19年、昭和28年、昭和37年、昭和46年、昭和55年、昭和64年
平成元年、平成10年、平成19年、平成28年

※注意:ただし、それぞれ上記の年の立春2月4日～翌年の節分2月3日迄生まれの方が該当します。

（七五三祝）

髪置　祝	平成26年生の男女（3歳）	髪を伸ばし整え始めること。
袴着　祝	平成24年生の男子（5歳）	男の子が初めて袴をはき始める年齢。
帯解　祝	平成22年生の女子（7歳）	女の子が今までの紐付着物から帯を締める大人の着物に替える年齢。

祈願祭（お祓い）は数え年でお受けしましょう。

「数え年」は、生まれた時点を1歳とし、新年を迎える度に1歳加えて行きます。これは、正月に各家を訪れる年神様から1つ年を頂くというありがたい意味があります。満年齢に誕生日前であれば2歳、誕生日を迎えた後は1歳を加える解釈となります。

安産祈願祭・腹帯清祓のご案内

彦島八幡宮は別名『子安八幡』とも称され、安産の神様としても崇められております。

腹帯をお清めされ、安産祈願祭を斎行されますことをご案内申し上げます。

各自腹帯もしくはガードルをご持参下さい。当宮の安産守護の御朱印を押印させていただきます。

古来より戌（犬）はお産が軽いとされることから、安産については、戌の日が吉日とされ、帯祝いなどにはこの日を選ぶ風習が伝承されております。懐妊五ヵ月が過ぎた最初の戌の日を選ぶ地方が全国的に多く見受けられます。

＊平成二十八年上半期の戌の日を表記いたしますのでご参照下さい。

1月	5日(火)赤口
	17日(日)先勝
	29日(金)先勝
2月	10日(水)先負
	22日(月)先負
3月	5日(土)先負
	17日(木)仏滅
	29日(火)仏滅
4月	10日(日)赤口
	22日(金)赤口
5月	4日(水)赤口
	16日(月)先勝
	28日(土)先勝
6月	9日(木)先負
	21日(火)先負

勧学祭のご案内
～新入学奉告祭並びにランドセル清祓式～

新1年生の新しい門出に当り児童、生徒のお子様ともに「初宮まいり」から成長を見守って下さった氏神様 大神様に詣でて奉告と感謝の祈りを捧げましょう。

日　時：3月1日から5月末日まで
午前8時30分～夕刻
祈願祭：彦島八幡宮本殿（社務所 tel266-0700）

①御守等お下がりを授与致します。
②ランドセル・学生カバン・体操着・文房具等ご持参下さい。お清めさせていただきます。
③参拝の服装は、私服・制服着用どちらでも構いません

◆お申込み方法
仮予約はお電話にて承ります。＊初穂料はお問い合わせ下さい。
祭典行事の都合によりご希望の日時に沿えない場合もございますので、ご確認下さい。

奇跡を発動する神宿る磐座
彦島八幡宮ペトログラフ

当宮には古代文字（シュメール文字）が刻銘された巨岩が奉安され、全国各地より参拝者が拝観のため訪れます。

自然崇拝にもとづく神宿る聖なる磐に神様を感じ、神様の威大なる力を戴かれて下さい。

※詳細は当宮ホームページをご参照下さい

発行所　彦島八幡宮社務所
下関市彦島迫町五丁目十二番九号
TEL ○八三―二六六―〇七〇〇
FAX ○八三―二六六―五九一一
ホームページ http://www.hikoshima-guu.net
発行者　柴田宜夫
編集者　山本光徳
平成二十八年一月一日
印刷・㈱ナカハラプリンテックス

彦島八幡宮　検索